

ジャイルズ・ウィンターボーンの死

北 脇 徳 子

KITAWAKI Tokuko

序論

トマス・ハーディの長編小説の中でも、『緑樹の陰で』（1872）、『はるか群衆を離れて』（1874）、『森林地の人々』（1887）は、彼の三大パストラル小説と呼ばれている。これらの作品は、彼の生まれ故郷である南イングランドのドーセット州の農村風景や、農牧業に従事する田舎の人々の生活が余すところなく描かれているまさに田園小説である。初期の二作品は、ヒロインがめでたく自分にふさわしい、朴訥であるが、誠実な田舎の若者をパートナーに選び、ハッピー・エンディングとなっている。しかし、ハーディの小説家としての円熟期に書かれた『森林地の人々』は、中心人物の一人であり、森の精霊とも言えるジャイルズ・ウィンターボーンが死に、彼が命をかけて愛し続けたグレイス・メルベリーは、元の夫エドレッド・フィッツピアーズとよりを戻して、新天地を目指して森を去り、密かにジャイルズを慕い続けていたマーティ・サウスが彼の墓に捧げる鎮魂歌で終わっている。なかなか戻って来ない娘を心配して、父親が村びとを総動員して森に捜しにやって来たものの、父の元には戻らず、浮気男の夫と去って行くグレイスの将来は、父親や村びとたちの話題の中で、不幸が予告されている。グレイスを中心に見れば、フェリス・チャーモンドと大陸に逃避行をしていた夫が、フェリスの死後自分の元に帰り、グレイスの方も、ジャイルズが死んで、結局、夫と元のさやに納まったことで、当座の解決策としてはハッピー・エンディングであろう。ところが、おそらく夫はまた浮気を繰り返すであろうし、グレイスは再び捨てられた妻の悲哀を味わい、彼女に安住の地がないことが予測されているのである。

一方、グレイスとの結婚が生涯の悲願であり、彼女の貞操を守るために命を捧げたジャイルズの死に対して、作者の哀悼の気持ちが静かな音色で奏でられている。長年、彼に仕えてきたクリードルの追悼のことは、マーティの初めて口にする彼に対する愛情の吐露、それにもまして、森全体が彼の死を悲しんでいると表現されているのである。ジャイルズは、ハーディが最も高く評価する美德を備えた人間であることに異論の余地がない。ディゴリー・ヴェンやゲイ

ブリエル・オウクと同じく、ジャイルズも「実践において、農業生活や技術の価値や、さらに騎士道精神や誠実さや深い愛情といった伝統的な美德の立派さを象徴している」(Brown 165)。しかし、ヴェンやオウクには幸せな結末が用意され、ジャイルズは悲劇的な結末を迎えるのである。これはいったいなぜなのだろうか。

本稿では、ジャイルズの死に焦点を当てて、彼を死に至らしめた原因と彼の死の意味を探ってみたい。まず、ヒロイン、グレイスの父親ジョージ・メルベリー、マーティ・サウスの父、ジョン・サウス、ジャイルズの亡き父親の三人を論じる。次にエドレッド・フィッツピアーズとフェリス・チャーモンドを分析し、そしてグレイスとジャイルズ、さらにマーティへと論を進めていきたい。ジャイルズ自身の性格が招いた結果であるとはいえ、ここに挙げた登場人物たちは、彼の死に深く関わっているのである。

1. 父親たち

ジョージ・メルベリーは、リトル・ヒントックで手広く材木商を営む裕福な実業家である。この村びとたちは、ほとんどが彼の仕事を請け負って生計を立てている。それゆえに、彼には大きな経済力があり、発言権がある。彼は、『森林地』の前作の主人公、マイケル・ヘンチャードを髣髴とさせる。ヘンチャードの場合と同じく、メルベリーがどのようにして財力を蓄えたかは描かれていないが、おそらくその負けん気の強い強情な性格と俗物根性で、ひたすら事業を拡大して成功していったのであろうと推測できる。「彼はいわゆるたたき上げの男であり、これまで一生懸命に働いてきた」(4章)と作者の説明にある。ヘンチャードが過去の妻売りの秘密を持っていたように、メルベリーにも過去がある。それは、ジャイルズの父親の許婚者を、策を弄して奪い取ったことである。彼は、一人娘のグレイスをジャイルズと結婚させることによって、自分の過去の罪を償おうと計画している。自分の犯した罪を悔恨して、それを娘に償わせるといふ身勝手な父親、それがメルベリーの本性である。さらに、若い時に自分の無学を級友たちに笑いものにされたという、苦い思い出を持っていて、一人娘に、自分の持つ財力をかけて教育して、彼らを見返してやりたいと願っている。そもそも、グレイスをジャイルズと結婚させるという企てを実現するのであれば、彼女に当世風の教育を受けさせる必要はないはずである。彼女は、ジャイルズと同じ土壌で育った田舎娘として、すんなりと彼と結婚したであろう。ところが、メルベリーのもう一つの野心の実現のために、都会で教育を受けさせられたグレイスは、「現代的な神経と原始的な感情を併せ持っていて、こうした組み合わせ故に苦悩する人」(40章)となるように運命づけられるのである。父親の二つの矛盾する願いの犠牲になり、グレイスはジャイルズとフィッツピアーズの間を揺れ動くのである。そして、そ

の揺れを大きく左右するのが、父親である。メルベリーの二つの願い、亡き友への償いと娘の出世に対する世俗的な欲望は、彼の心の葛藤を生み出し、彼自身がその時々によって大きく揺れ動くが、勝利を取めるのは、彼の道徳心ではなく野望である。

グレイスが洗練された上品さと知的教養を身に着けて、帰郷してきたのを知ると、田舎者のジャイルズに娘をやるのが惜しくなり、娘の社会的地位を引き上げて、上流社会に入りたいという彼の「世俗的願望」(12章)がますます強くなる。彼はまずグレイスに、彼女にどれだけの投資をしてきたかを知らしめるために、支払いの控えを見せる。馬や荷馬車や小麦と同じように、自分が投資の対象になり、その収益を期待されていると知ったグレイスは、「わたしをそのように考えないで！ただの動産のように」(12章)と懇願するが、すぐに父親に説得され、ジャイルズには会わないと約束する。メルベリーは、彼が管理するリトル・ヒントックの土地を所有し、ヒントック屋敷に住むチャーモンド夫人に憧れを持っていて、グレイスを彼女の階層に引き上げてもらいたいと思っている。メルベリーが取り持ち、グレイスはチャーモンド夫人を表敬訪問するが、偶然、鏡の前に立った二人の姿を見たチャーモンド夫人は、自分の容貌がグレイスよりも劣っていることを認識させられてしまう。その結果、彼女はグレイスを置き去りにして、一人で大陸へ行ってしまふ。メルベリーは、チャーモンド夫人がグレイスをコンパニオンとして大陸へ一緒に連れて行かないのは、娘がジャイルズのような田舎者と付き合っているせいだと決めつけ、彼との交際を禁じるのである。

ジョン・サウスの死によって、ジャイルズの土地の借地権も切れ、ジャイルズが土地と家を失うに至り、メルベリーは友への償いからきっぱりと決別して、喜んでグレイスとフィッツピアーズとの結婚のお膳立てをする。土地の人々と同じく、盲目的に貴族を崇拝しているメルベリーは、フィッツピアーズとの結婚をためらうグレイスを、かつてのフィッツピアーズ家の領地に案内して、名門の出である彼との結婚を強く勧めるのである。父親の勧めとフィッツピアーズの強引な求婚に屈服して彼と結婚するが、新婚旅行からリトル・ヒントックに帰ってきたグレイスを待ち受けていたものは、夫の村や村びとに対する嫌悪感と浮気である。フィッツピアーズは、自分と村びとは別の人種だと言って、妻のグレイスに彼らとの交際を禁じ(25章)、ジャイルズが贈った馬に乗り、毎晩、チャーモンド夫人の元に通う。娘の不幸を目の当たりにしたメルベリーは、自ら出向いて、夫人と面会して、フィッツピアーズとの情事を止めて欲しいと懇願する。その日、夫人の屋敷で、グレイスの馬とメルベリーの馬を乗り間違えたフィッツピアーズが落馬する。メルベリーは、彼を助けるが、フィッツピアーズが酔いに任せて自分の不遇を愚痴り、夫人との結婚の希望を口にするにおよび、怒って彼を馬から突き落とす。娘の幸せのために父親の取った行動が、結局、皮肉なことに、フィッツピアーズとチャーモンド夫人を大陸へ逃避行させる原因となってしまうのである。

自分の押し進めた結婚によって、夫に捨てられた妻という苦しい状況に立たされている娘を救うために、メルベリーは、新しい離婚法にすがりつき、今度は、ジャイルズとグレイスを結婚させようとする。しかし、彼の奔走も無駄に終わり、グレイスは夫とは離婚できないことが判明する。

メルベリーは、まだグレイスとジャイルズが幼い頃から、二人を結婚させると約束しておきながら、友への償いを反故にし、グレイスを彼らより社会階層が上のフィッツピアーズと結婚させた。娘が夫に裏切られて不幸になると、今度は、ジャイルズと再婚させようとする。グレイスとの結婚を一旦あきらめたのに、再び、結婚の希望をほんの束の間持たされたジャイルズは、彼女との結婚の夢を完全に断たれた時、絶望する。彼に残された道は、グレイスのために死ぬことしか残っていない。メルベリーは、グレイスの人生を自分の野望のために犠牲にし、さらにジャイルズの生きる希望を二度も奪い去る。彼は、子どもたちを翻弄するエゴイスティックな父親である。

ジョン・サウスは、自分と同じ年齢の榆の木の妄想に憑りつかれている。「人間の心を持ち、自分を支配し、奴隷にするために、自分が生まれた時に芽を出した」(14章)と言って、風に揺れる木が自分を押しつぶそうとしているかのように恐れおののく。彼は自分の家だけではなく、ジャイルズの家も土地も自分の命にかかっているという重圧を跳ね除ける力を持っていない。自分の命の重さを意識すればするほど、木が悪霊のように倒れてきて自分を殺そうとしているという幻想を見るのである。この木は製材用であり、チャーモンド夫人の所有するものであるが、ジャイルズは、彼女の許可なしに、サウスのために木の枝を切り払って風の抵抗を少なくする。しかし、かえってその木の高さが目立ち、ファルスのような姿に、サウスはさらに恐怖心を募らせる。サウスの診察に来たフィッツピアーズと相談の上、ジャイルズが木を切り倒すと、サウスは木のない空に驚愕し、発作を起こしてあっけなく死んでしまう。

マージョリー・ガーソンは、「グレイト・マザーが人を惑わせていることが、ジョン・サウスの寓話にもまた議論されている。彼女は自分自身の客観的なイメージを、彼女が創造しているのだが、思い違いさせようとしている点において、彼女の秘密の真実を隠している。それは破滅や死の種は自分自身の中にあるのだということである」(Garson 91)と指摘している。サウスはまるで木が生きている悪霊であるかのような、根拠のない恐怖に捕らわれている。彼にもこの迷信から脱却する精神力、子供たちを守ろうとする父親としての愛情と義務感があれば、彼の死は避けられたであろう。彼のこの致命的な強迫観念と、ジャイルズの父親が借地権を息子の代まで延長しないで、親としての義務を怠ったこと。この二人の父親の弱点が組み合わさって、ジャイルズを破産させたのである。

2. フィッツピアーズとチャーモンド夫人

エドレッド・フィッツピアーズとフェリス・チャーモンドは、二人ともリトル・ヒントックの土地の人ではなく、他所からの侵入者である。フィッツピアーズはジャイルズの許婚者を奪い、チャーモンド夫人は彼の土地と家を奪ってしまう。ジャイルズは長年の夢であるグレイスとの結婚をあきらめ、精神的に打ちのめされた上に、土地と家を失くして経済的にも破綻するのである。

フィッツピアーズは丘の中腹に間借りをしている若い開業医である。彼は多くの女性を同時に愛せる人物であり、この点においては、トロイやアレックの系譜である。村の娘で恋人のいるスーク・ダムスンと関係を持ち、グレイスと結婚後にチャーモンド夫人との情事に夢中になる。女性だけではなく、彼の趣味の範囲も広く、錬金術、占星術、天文学、解剖学、詩学、抽象哲学といったさまざまな学問に、その時々気分に応じて熱中するといった研究者タイプであり(17章)、「現実の世界よりも観念の世界を、原理の応用よりもその発見をずっと好んだ」(16章)。読書家で知的な観念論者であり、シェリーの詩を口ずさむ時の彼は、エンジェルやスーに似ている。テスがエンジェルの俗世間からかけ離れた観念的な性格に惹かれたように、グレイスもまたフィッツピアーズの「洗練された教養豊かな内面の生活や繊細な心理的交流が得られる可能性」(23章)に惹かれる。メルベリーは彼がかつて近隣の土地を支配していた名門の貴族、オークベリ・フィッツピアーズ家の末裔であることに尊敬の念を抱く。村びとたちも、彼の得体のしれない研究を「悪魔に魂を売った」(4章)とうわさしながら、彼が貴族の出身であるということだけで尊重する。しかし、実際にグレイスと結婚してメルベリー家で開業することになったフィッツピアーズを、村びとたちはもう彼を雲の上の人ではなく、自分たちと同等の者だと思い始める。こうして彼を包んでいた後光が消え、凡庸な医者に成り下がり、だんだん患者が減っていくのを見て、彼はそれをグレイスとの結婚で自分の格が落ちたからだ、彼女との結婚を後悔して、村びとと同類である彼女を疎み始める。そして、チャーモンド夫人との情事に現実逃避をするのである。「彼は自分自身以外のどんな世界の現実も、それが森であろうと、そこに住む人々であろうと、感じるができないのである」(Gregor 151)。もっと土地にしっかりと根を下ろして、村びとから信頼され、医者としての実力を認められるように励むのが、彼の生きる道である筈だ。しかし、彼は、クリムやエンジェルと同じく、現実認識ができない観念論者なのである。

フィッツピアーズは、森やそこに住む人々を見下し、彼らの道徳心をかき乱す侵略者である。彼はオリヴァー婆さんの頭蓋骨を生前契約して買い、彼女に恐怖心を与える。グレイスがオリヴァー婆さんにその契約の取り消しを頼まれて、彼を初めて訪問する。その時に、彼はジョン・

サウスの脳の断片を顕微鏡で調べている。彼女も顕微鏡をのぞき、彼のこの研究に敬服するのである。これがきっかけとなり、フィッツピアーズとグレイスの交際が始まる。頭蓋骨の代わりに今度はグレイスが、彼に捕まってしまうのである。こうして、フィッツピアーズは、ジャイルズからグレイスを略奪するが、一時の気まぐれと空想で、グレイスを獲得したものの、彼女との結婚生活を実際に始めるとすぐに、彼女を捨ててしまう。彼の女性遍歴は、グレイスと再出発した後も続くであろうと、父親も村びとたちも指摘している。しかし、フィッツピアーズは、娘を所有物だと思っている父親からグレイスを再び勝ち取る。新妻スークとフィッツピアーズの仲を疑い、彼に報復しようとティモシー・タングズの仕掛けた人取り罠は、フィッツピアーズではなく、グレイスのドレスに掛かり、これが、フィッツピアーズとグレイスの仲を取り持つという喜劇的な顛末を迎える。フィッツピアーズはティモシーにも勝つのである。

フィッツピアーズがサウスの恐れる楡の木を切り倒すようにと指示した治療法は、結局は、サウスの死を招くことになる。彼が招いたサウスの死、そして彼のグレイスとの結婚は、ジャイルズの破滅の原因であるが、ジャイルズとは違い、フィッツピアーズは生き残る勝者なのである。

フェリス・チャーモンドは、ハーディ小説のおなじみの登場人物、「人生の目的を捜して、退屈に身を委ねている、生まれが謎に包まれた金持ちのレディ」(Gregor 151)、すなわち、前作の『カスターブリッジの町長』に登場してくるルセッタ・テンブルマンの後継者である。チャーモンド夫人は、20歳か30歳も年上の裕福な実業家と結婚して、リトル・ヒントックの森林地帯を購入した夫が亡くなると、一人でヒントック屋敷に住んでいる。彼女の屋敷に収集されている密猟者を捕まえるための人取り罠は、「その階級虐待と性的略奪の二つを連想させ、彼女にふさわしい象徴」(Garson 86)となっている。彼女の素性は、「好きでもないのに微笑んで、結婚しないのに愛するといった女性です。チャーモンド氏と結婚する前には、短い間ですが、女優でした」(31章)と、ジャイルズの口から語られている。彼女は無為に日々を過ごし、空想と気まぐれに身を委ね、その語る言葉や口調、動作のすべてが「芝居じみている」(Gregor 151)のである。彼女が男性と戯れていない時は、大陸旅行をしている。自分の印象記を残したいと思い、郷里に帰ったばかりのグレイスを招き、自分では書きたくないので彼女に代筆を依頼するが、それはその場限りの思いつきで終わる。「彼女の興味は彼女の情熱と同じく無益で、しかもこれらは見せかけで、長続きしない」(Williams 173)のである。

チャーモンド夫人は馬車の転倒でかすり傷をして、若い医者フィッツピアーズを屋敷に呼び寄せる。優美な姿で寝椅子に横になって煙草を吸いながら、彼を待ち受けるその姿は自分が見られることを意識したポーズであり、男性を虜にしよう待ち構えているセクシュアルパワーの表象である。かつてハイデルベルグで自分に憧れを抱いていた若者と彼が同一人物であ

ることが判明すると、二人はそのセンチメンタルな思い出に浸り、急速に親しくなる。何もすることがなくて退屈している裕福なチャーモンド夫人は、フィッツピアーズを魅了する(charm)。現実から逃げたいと願っているフィッツピアーズもお金があり、美しく、魅惑的な彼女に飛びつく。二人の情事は「退廃的で、センチメンタルなロマンス」であり、「無限の空想、無意味な夢、快楽趣味の憂うつ」(Williams 173)を糧としているのである。

チャーモンド夫人は自分の所有する土地にも住人にも何の興味も関心もない。

彼女が村びとのどんな人とも直接的な関係を持たなければならない時、それは彼らから何かを—マーティの髪、ジャイルズの家、グレイスの夫を奪いたいからである。それぞれの場合、彼女は必要性からではなく、あるささいな感情—虚栄心、憤り、あるいは感傷を満足させるために行動しているのである。自分の気まぐれを満たすためにに関して言えば、彼女にとって、いかなるものもそれほど重要ではない。(Williams 174)

ジャイルズの重い材木を積んだ荷馬車隊とイタリアへ行く彼女の馬車とが鉢合わせになり、彼が道を譲らなかったというちょっとした衝突事件がある。自分の命令を聞き入れなかった彼に怒りを覚えたチャーモンド夫人は、ジャイルズの借地権の延長願いを却下する。広大な土地を所有する彼女にとっては、たいした影響もない財産であるが、ジャイルズにとっては、彼の生存をかけた嘆願書である。ところが、彼女は自分の土地に住む住人の生活や気持ちを汲み取るような温情を持ち合わせていないので、無責任にも、一時の感情で代理人に家の取り壊しの支持を与える。これでジャイルズの破産が決定的なものになるのである。

ルセッタは、ヘンチャードとの過去を暴かれて、彼と彼女の人形を馬に乗せて町中を引きずり回すという、密通をした男女を制裁するスキミティ・ライドを見て、ショックのあまり流産して死ぬ。チャーモンド夫人も同じく「性的な罪によって滅ぼされる」(Williams 173)のである。彼女に売った髪の秘密を書いたマーティの手紙を受け取ったフィッツピアーズは、その事実を知ってから、恋の熱が冷めて彼女の元を去る。チャーモンド夫人は、彼を追いかけて行った道すがら、物語の最初からずっとチャーモンド夫人をストーカーのように付け狙っていたサウス・カロライナ出身のイタリア人の元恋人に射殺される。彼女の豊かな髪は実はマーティのものであったということが暴露されたことが、間接的な原因となって、チャーモンド夫人の死を招く。彼女とフィッツピアーズの情事の終わりと彼女の死は、余り強調されずに、読者はうわさとして伝えられるだけである。作者は彼女の死をこのように軽く扱っているのである。チャーモンド夫人は、お金の力でマーティの髪を奪い、性的魅力でグレイスの夫を奪い、一時の憤りでジャイルズを破産させる。彼女の死に様は彼女の生き方を象徴している。

3. グレイスとジャイルズ

ジャイルズの悲劇の一番の原因は、グレイスの性格にある。彼女は「昔ながらの本能を秘めた素朴な田舎娘」(28章)であるが、娘の出世に世俗的な野心を持つ父親によって都会の寄宿学校で当世風の教育を受けて、洗練された教養のある女性となって郷里にもどって来る。本質的にはジャイルズとマーティの田舎の世界に共鳴する資質を持っているが、教育を受けたために、フィッツピアーズとチャーモンド夫人の都会の世界にも属する現代女性になっている。彼女が、この相対立する二つの世界に属している女性であることに大きな問題点があり、「グレイスの『分裂した自己』が、この小説によって探究されるすべての葛藤の焦点である」(Sumner 98)と、ローズマリー・サムナーも指摘している。グレイスは、ハーディの最後の小説である『日陰者ジュード』のヒロイン、スー・ブライドヘッドのプロトタイプである。グレイスの葛藤は、スーにおいてはさらに激しい自己分裂となって描かれ、彼女の性格は神経症的な症状を呈している。

帰郷してきたグレイスは、「すでに古きよきヒントックの暮らしぶりから、すっかり脱け出してしまっていた」(6章)ので、森に興味を失くし、りんごの木の区別もできない。彼女は売り物のりんごの木を持って立っている粗野なジャイルズを見て、一瞬、本能的に尻込みする。ヒントック屋敷に招待されて有頂天になり、彼に教養をひけらかせて優越感に浸るグレイスを見て、ジャイルズは自宅でクリスマスパーティーを開いてメルベリー一家を招待して、彼女の心を繋ぎ止めようとする。しかし、彼らより貧しい生活をしている自分を卑下するあまり、ジャイルズが、彼らに大げさなパーティだと伝えなかったので、準備が整う前に一家が来て、慌てふためいた彼に追い打ちをかけるように、一緒に招待した村びとたちの騒ぎや料理の不手際、さらに、最後のダンスまで、踊り方を忘れてしまっていたグレイスが加わらないという決定的な失敗に終わる。グレイスが彼の粗末な家で示した居心地の悪さも当然のことながら、皮肉にも、彼の粗野な暮らしぶりを露呈する結果となる。これがメルベリーに娘をジャイルズと結婚させたくないという気持ちに拍車をかけることになるのである。

ジョン・サウスに悪霊のように憑りつく木の枝を伐採するために、木に登っていたジャイルズに、父親に従順なグレイスは彼を諦めると伝えつつ、彼がそれを否定してくれることを期待しながら、彼の返答を待っているが、彼が闇の霧の中で身動きもせず、絶望のあまり、何の返事もしないので、立ち去る(13章)。これは「彼の恋人としての致命的な無能さ」(Giordano, Jr. 146)を読者に想起させる場面になっている。彼は、「自然との知的交流」(44章)のできる有能な森の職人であるが、だからと言って、人間との交流、わけても男女間の交流ができるわけではない。ジャイルズにはグレイスが伝えようとしている符号を読み取れないし、彼女の変わ

りやすい性格も理解できないのである。ハーディ小説においては、正直で誠実な田舎者は、恋の敗者なのである。

実は、「彼女は、皮肉屋であれば、典型的な女性の特質だと表現したであろうと思われるつむじ曲がり、ジャイルズに対して気まぐれで変わりやすい」(Dutta 87) 性格の女性として描かれている。 グレイスは、ジャイルズが比較的裕福で婚約者としての資格を持っている間は、彼にそれほど関心を持っていない。ところが、ジョン・サウスの死によってジャイルズの破産が決定的になって初めて、「心優しいグレイスが、ウィンターボーンに対して、婚約者であった時よりもずっと深く同情し、ずっと大きな関心を寄せるようになっていたことに、疑いの余地はない」(15章)と、作者は語っている。それは、マーティの書きたいはずら書きの「おお、ジャイルズよ、住む家を失う/故にジャイルズよ、グレイスを失う」の「失う」を、グレイスが「保つ」に書きかえたことにも表れている(同章)。ところが、自分を余りにも過小評価し、自尊心を持たないジャイルズは、マーティの書いた詩を自分の運命を決定する予言だと信じて、グレイスの書きかえた文字を忘れ去る。一方、グレイスの方も、「自分が何かをする前に、誰かが何かをするのを待つ」(5章)という、本来、受動的な性格のために、彼の婚約解消の手紙を読んで、それ以上の行動を起こさずに、自分の将来を運命に任せてしまうのである。

聖ヨハネ祭の前夜、黒魔術を占う村娘たちの儀式に参加したグレイスを胸に抱くチャンスがありながら、ジャイルズは、彼より一歩先に出たフィッツピアーズに、彼女を取られてしまう。ジャイルズは「恋の落伍者」であり、「彼に特有の無関心と敗北主義のために、フィッツピアーズが大胆にも前に出て、彼のまさに面前で、グレイスをさらう時、控えていた手を差し出すことを潔しとしない」(Dutta 88) のである。この象徴的な略奪の場面は、ジャイルズの敗北と後退、すぐに行われるフィッツピアーズとグレイスの結婚を予知させるものとなる。

ジャイルズの自己評価の低さ、自分自身に対する過小評価と自己抑圧は、全編を通じて、何度も言及されている。自分の気持ちを語ることばを持ち、執拗に恋人を手に入れる方法に長けているフィッツピアーズとは違い、ジャイルズは、自分の心を語らず、簡単に恋人としての資格がないとあきらめている。彼のこのふがいなさのために、グレイスも犠牲になっている。彼には恋人としての「忍耐力がない」(19章)と彼女は思っている。「本当に、彼の感情を不自然なほど抑制することは、致命的な間違いである」(Giordano, Jr. 147)。ジョルダノ・ジュニアは、次のようにジャイルズの性格を分析している。

最終的に、ジャイルズはグレイスと彼の財産を失う。しかし、多くの点で彼に似ているゲイブリエル・オウクと違って、ジャイルズは失敗から学ばない。彼は、取り返せる苦難や危険に二度と打ちのめされないことを保証するために、エネルギーな弾性ですぐに立ち直

ることをしないのである。(中略) 逆説的に言えば、失敗に拘泥して、命を犠牲にすることによってしか自己実現できないのである。(Giordano, Jr. 148)

新しい離婚法に一縷の望みを持って、グレイスをフィッツピアーズと離婚させて、ジャイルズと再婚させようとメルベリーがロンドンに出向き、グレイスは夫の裏切りを経験して、ジャイルズを「秋の兄弟」(28章)だと見直し、彼の中に誠実で純粋な男らしさを発見して、彼に愛情を注ぐようになる。しかし、当のジャイルズは、彼女に対して過度な崇拜の念を持っていて、彼女を生身の人間というよりもむしろ、「石膏で作られた聖人」(Williams 178)のように扱っている。彼女は洗練されているのに、自分は無骨であり、結婚しても、自分たちは決して幸せになれないだろうと思い込んでいる。さらに、離婚できないという事実を彼女よりもいち早く知ったが、彼女が彼に唇を差し出した時、その誘惑に屈し、生涯に一度だけ、彼女を自分の胸に抱こうと決心する。彼はこの「情熱的なキスと長い抱擁」(39章)の後、グレイスの誘惑を責めるのではなく、自分がカインであるかのように自分自身を弾劾するのである。

チャーモンド夫人が死んで、フィッツピアーズが妻を取り戻すために、リトル・ヒントックに帰って来るという手紙を受け取ったグレイスは、「ダフネ的本能」(40章)に突き動かされ、発作的に家を飛び出し、ジャイルズに助けを求める。グレイスに犯した罪を償おうと決心していたジャイルズは、彼女が頼ってくれたことを喜び、彼女の貞操を守るために小屋を彼女に空け渡し、自分は粗末な編垣の小屋で腸チフスの病み上がりの体を雨風に晒して死ぬのである。

グレイスがジャイルズの小屋を奪ったことが、おそらく彼の死の直接的な原因であろう。グレイスは、彼が肉体を持つ一人の人間であると考えたことがなく、彼は「愛する存在、思慮分別のある相談役、家族の友人として、そこに居る」(Gregor 150)のであって、彼が病気であることに思い至らない。その上、「グレイスの貞操を守るために、ばかげたシナリオを作ったのは、ジャイルズなのである(これはあまり気づかれていないが)」(Langbaum 121)。自分の体面しか考えず、彼の義侠心に甘えた愚かなグレイスは、彼の異変に気が付いて、世間の因習をかなぐり捨て、危篤状態の彼を精一杯看病するが、時すでに遅し、最愛の人を救うことができなかった。ジャイルズは、森の暗闇の中に消えて行ったのである。「自然、彼がずっと仕えてきたグレイト・マザーが、彼に手を差し伸べることを拒否したのである」(Garson 89)。

グレイスにもスーのファム・ファタールの要素が付与されている。ジャイルズは、グレイスの女性特有のつむじ曲がりに翻弄されながらも、彼女に一途な愛を捧げて、その愛に殉死するのである。ジャイルズとグレイスが結婚できなかった大きな原因の一つは、彼女が教育によって、ジャイルズの手が届かない世界の女性になってしまったことにある。ハーディはいつも教育を否定している。そして、グレイスに、「私は、マーティと同じようになりたい」、「教養な

んで、私に不都合と困難しかもたらさなかったわ」(30章)と言わせている。自分を過小評価し、彼女の示した愛情に答える自尊心と自信を持たなかったジャイルズにも、責任の一端があるが。ジャイルズの意志は果たされなかったが、ハーディはここにもう一人の女性、マーティ・サウスを配することによって、彼の死をより崇高なものにしている。

4. マーティ・サウス

マーティ・サウスは、最初から、女性としての要素をはく奪されている。女性の美の象徴である彼女の豊かな髪は、チャーモンド夫人に奪われて、彼女の性的魅力を一層高めることになる。この髪のエピソードは、小説の最初で語られる。マーティがひそかに慕っているジャイルズは、グレイスを愛しており、自分の恋が決して成就しないことを知った時に、マーティは自分の豊かな髪をぱっさりと切り落として、それをチャーモンド夫人に売る決心をする。「それは、絶望の象徴的な証であり、経済的な降伏ではない」(Garson 86)。ジャイルズは髪を切った彼女の姿を、「門柱の上のりんごみたいに見える」(3章)と表現する。彼の言葉には、彼がマーティを女性だと考えてみたことがない事実が伺えるのである。

マーティには、ジャイルズとグレイスの恋を妨げる「悪漢としての役割」(Dutta 75)が与えられている。彼女は父親が死に、誰も気にかけてくれる人がいない孤児になり、一人ぼっちで毎日の厳しい労働と貧しい生活に対して苦しい戦いを強いられている。彼女の心情をシャンタ・デュッタは、みごとに解明している。

彼女は、あたかも、自分よりも有力で恵まれている恋のライバルに対して、嫉妬にかられ、どんなことも恋の戦いにおいては公正であると考えているようである。マーティは、明らかに、ジャイルズの弱点—名誉を重んじる繊細な感覚—を知っていて、彼女が壁に書いた警告を通じて、おそらく、彼とグレイスの社会的な不釣り合いを彼に気づかせようとしているのであろう。(Dutta 75)

マーティの予言めいたいたざら書きはみごとに功を奏して、ジャイルズは長い間胸に抱いてきたグレイスへの想いを断ち切り、グレイスもまたマーティの「失う」を「保つ」に書きかえてささやかな抵抗をするが、ジャイルズに真意が伝わらないまま、運命に流されてしまう。

聖ヨハネ祭の前夜、オリヴァー婆さんに、グレイスが走って来る通り道をジャイルズに知らせるようにと促されて、「常に欲望を義務の犠牲にする定めにある哀れなマーティ」(20章)は、その道標役をする。そして、彼女はフィッツピアーズがジャイルズを出し抜いて、グレイスを

抱く結果になった場面をみることになる。マーティはグレイスがジャイルズと結ばれない結果になったことを、喜んでいたらかも知れないが、彼女の心情は小説の中で余り語られていない。

フィッツピアーズと結婚したグレイスに危機が訪れる。夫の浮気である。マーティは、グレイスとジャイルズが結ばれる可能性が出てきた時、それをくい止めるために、また、行動する。

彼女の「唯一の切り札」(33章)、自分の髪がチャーモンド夫人の鬘になっていることを知らせる手紙を書いて、フィッツピアーズに渡す。彼女は「こうした暴露は、恋人にとって致命的であろうと考えて」(同章)、その切り札を使ったのである。彼女の手紙が、フィッツピアーズとチャーモンド夫人の破局を引き起こし、ジャイルズの英雄的な犠牲、最終的には、グレイスとフィッツピアーズのリユニオンとなる。マーティは、ジャイルズの愛を勝ち取る可能性がなかったとしても、ジャイルズが独り身でいる限り、彼に対する想いを、誰にも邪魔されずに、抱き続けることができるのである。生きている時は決して彼女のものにならなかったジャイルズは、死んでやっと彼女一人のものになったのである。

「マーティは仕事をしている時のみ存在する。そして、それ以外にはいかなる自己達成も許されていないのである」(Williams 176)。彼女は病気の父親の代わりに、夜中に、熟練の技術を必要とする藁葺き屋根職人が使う留木を作り、森で「男たちの技術と忍耐が及ばない小さな枝の樹皮を剥ぎ」(10章)、ジャイルズと共に、寒風の中で、苗木を植える。マーティは、ジャイルズの「真の補完者」であり、「相棒」として生き、彼女だけが「自然と知的交流をすることにおいて、ジャイルズの水準近くまで達していた」(44章)である。ジャイルズとマーティは、「森の神秘を常識的な知識として保ち」、「その象形文字を」(同章)読み取ることができたのである。ジャイルズの墓に参る彼女の姿は、「いくつかの点で崇高さに達し、女性の属性を平然と拒絶し、抽象的な人間性という、さらに高尚な資質を得た存在であるかのように見えた」(48章)と表現されている。女性ではなく中性的な存在になったマーティが、ジャイルズの道具と彼の仕事を譲り受け、彼の後継者となるのである。

マーティはジャイルズの墓に向かって、「あなたは私のもの。そして私だけのもの」とささやく。さらに、彼の仕事を続けていく自らの決意を次のように語るのである。「カラマツの若木を植える時には、いつも、あなたのように植えられる人はいないと思う。留木棒を割る時、りんごの圧搾機を回す時、いつも、あなたのようにできる人はいないと言う」。ジャイルズの人生は、「あなたは良い人で、良い行いをした」(同章)というマーティの言葉によって、最終的に高く評価されるのである。

結論

この作品は、二つの結末で終わっている。ヒロインのグレイスが、再び、フィッツピアーズの求愛を受け入れて、彼と再出発するために森を出ていくというハッピー・エンディングとは言えない結末と、ジャイルズの墓に詣でるマーティの鎮魂歌で終わる結末である。フィッツピアーズの求愛を再び受け入れるグレイスは、まるで、チャーモンド夫人の再来のようである。グレイスは、ジャイルズと生活していたかのように装い、夫に条件をつけ、簡単には寄せ付けず、彼の気持ちを翻弄する。彼女は、ジャイルズの死の原因は彼の以前から患っていた腸チフスにあり、彼女のせいではないと医者の方に保証してもらい、ジャイルズを忘れて、夫の元に戻る。フィッツピアーズを征服して、まるで女王のようにふるまうグレイスは、すっかり、コケティッシュな女性に成り下がっている。ハーディは、グレイスの将来は決して安泰ではないと、父親のメルベリーや村びとの口から語らせている。

メルベリーは、娘をゴムまりのように、後ろから突いて、ジャイルズとフィッツピアーズの間を行ったり来たりさせ、彼女を操る。木を自分の化身だと信じて、木が倒れたら自分も死ぬという妄想に憑りつかれたサウスは、あっけなく死ぬ。息子の代まで借地権を延長する更新の手続きを怠った亡きジャイルズの父親。これら三人の父親たちは、ジャイルズの人生を破綻させた。フィッツピアーズとチャーモンド夫人は、リトル・ヒントックに他所から侵入して来て、グレイスをジャイルズから奪い、彼の土地と家を奪った。グレイスは教育を受けて、元の田舎娘の素朴さを失い、ジャイルズの手が届かない洗練されたレディとなり、彼女の女性特有のコケティッシュな性格で彼を翻弄した。こうした彼を取り巻く人物だけではなく、恋に不器用で、常に自分を卑下して、グレイスを崇拜し、生涯の愛を彼女に捧げながらも、彼女を獲得できなかった彼自身の性格にも、彼の死の原因はある。

『森林地の人々』の舞台となっているリトル・ヒントックの森は、過酷な生存競争の世界である。人間だけではなく、森の木々もまた「果たされざる意志」を示しているのである。「葉は変形し、曲線は歪み、先端は妨げられる。地衣は幹の生命力をむしばみ、蕁は絡みついては、成長しようとする若木をゆっくりと死に至らしめるのだ」(7章)。この森の象徴であるジャイルズ・ウィンターボーンは、死んで森と一体とならなければならないのである。

ジャイルズには、森の苗木を成長させる「魔術師の優しい感触」(8章)を持つ指と、森の記号を読み取り、森と知的交流できる能力を与えられている。彼は、人間社会の生存競争においては敗北者であるが、森と一体感を持つ彼の姿は、ハーディの理想像である。だからこそ、作者は、彼の敗北をより崇高なものにしているのである。作者が、彼の死を悼み、彼の禁欲的な生き方を称賛し、彼を森の中に包みこんでいるのである。

森全体が死の家のように思えた。森の隅々にまで、死が行き渡っていた。ウィンターボーンがこの世を去り、樹木は彼の不在を示しているように見えた。若い木々は、彼が植えたものであり、彼らが倒れる前に自分が倒れると言っていたように、まさにこの時、彼の手が巧みに向けた方向に、その根を広げつつあった。(43章)

ジャイルズが死んでも、森は生き残っていく。彼の死に森の木々が喪に服し、彼に長年仕えたクリードルが、彼の一族の最期を「失っちゃいけねえ一族だったのになあ」(同章)と惜しみ、マーティが鎮魂歌を捧げる。ハーディは、ジャイルズの死をまさにパストラル・エレジーに仕立てて、彼に敬意を表しているのである。そして、マーティの言葉を最後に語ることによって、「個人は破滅していく、それでも、生活を創造する仕事は続いていく。死のさなかに、生が存在するのである」(Williams 179) というメッセージを伝えているのである。

日本語訳については次のものを参考にした。

トマス・ハーディ『森林地の人々』新妻昭彦訳、大阪教育図書、2014年

引用文献

- Brown, Douglas. 'Transcience Intimated in Dramatic Forms' (1954). *Thomas Hardy: Three Pastoral Novels*. Ed. R. P. Draper. London: Macmillan, 1987. 157-170.
- Dutta, Shanta. *Ambivalence in Hardy: A Study of his Attitude to Women*. London: Macmillan, 2000.
- Garson, Marjorie. *Hardy's Fables of Integrity: Woman, Body, Text*. New York: Oxford UP, 1991.
- Giordano, Jr. Frank R. "I'd Have My Life Unbe": *Thomas Hardy's Self-destructive Characters*. Alabama: The University of Alabama Press. 1984.
- Gregor, Ian. *The Great Web: The Form of Hardy's Major Fiction*. London: Faber and Faber, 1974.
- Hardy, Thomas. *The Woodlanders*. The New Wessex Edition. London: Macmillan, 1974.
- Langbaum, Robert. *Thomas Hardy in Our Time*. New York: St. Martin's Press, 1995.
- Sumner, Rosemary. *Thomas Hardy: Psychological Novelist*. London: Macmillan, 1981.
- Williams, Merryn. 'A Post-Darwinian Viewpoint of Nature' (1972). *Thomas Hardy: Three Pastoral Novels*. Ed. R. P. Draper. London: Macmillan, 1987. 170-179.